

## ある自然主義文学論

ポール・ブルジェ『現代心理論集』をめぐって

田中 琢三

### 1. 『現代心理論集』について

ポール・ブルジェ(1852-1935)の『現代心理論集』(*Essais de psychologie contemporaine*)は、1881年から1885年にかけて書かれた10篇の作家論から成る評論集である<sup>1</sup>。その主題は、ブルジェが青年期(おおよそ第二帝政の後期)に読んで影響を受けた前世代の作家達の感性を分析することにより、「現代」つまり1880年代前半に、彼と同世代の文学者の間に蔓延していたペシニズムの風潮の原因を解明することにある。ブルジェによると、文学作品に表れた作家の感性は、その読者の感性に大きな影響を与える。従って、

新しい世代に特有の精神状態は、前世代の理論や夢想の中に萌芽として含まれていた<sup>2</sup>

という。つまり『現代心理論集』のテーマは、前世代の作家達作品から、もろもろのペシニズムの萌芽を見つけ出し、そして、それらの萌芽が、「現代」になってどのように開花しているのかを分析することである。言い換えれば、

---

<sup>1</sup> ブルジェは1881年11月から翌年12月にかけて「ヌーヴェル・ルビュ」誌に「現代の心理、覚書と肖像」(*Psychologie contemporaine, Notes et portraits*)と題したシリーズで、5編の作家論を発表し、それらをまとめて1883年初頭、ルメール社から「現代心理論集」(*Essais de psychologie contemporaine*)として刊行、そして1883年4月から1885年10月にかけて、同シリーズでさらに5編の作家論を発表、それらを1885年末に同社から「続現代心理論集」(*Nouveaux Essais de psychologie contemporaine*)として刊行する。1899年には正統2巻をまとめ、さらに16編の「補遺」(*appendice*)や注を加えた決定版をブロン社から刊行した。本論考では、この決定版を底本にした以下のテキストを使用する。Paul Bourget, *Essais de psychologie contemporaine, Études littéraires*, édition établie et préfacée par André Guyaux, Gallimard, coll. <Tel>, 1993.

扱われている作家は、決定版の掲載順にシャルル・ボードレー、エルネスト・ルナン、ギュスターヴ・フローベール、イポリット・テーヌ、スタンダール、アレクサンドル・デュマ・フィス、ルコント・ド・リール、ゴンクール兄弟、イワン・ツルゲーネフ、アンリ＝フレデリック・アミエル。なお1880年代前半のブルジェの批評を問題にする本論考では、16編の「補遺」は扱わない。

<sup>2</sup> Bourget, *op. cit.*, p.437.

この評論集から、ブルジェが前世代文学をどのように受容したのかを読み取ることができる。その批評の方法や特徴は、彼の以下の文章に要約される。

もろもろの概念ともろもろの大きな仮説によって、半ば社会的で半ば文学的な心理の研究を試みる<sup>3</sup>

ブルジェは『現代心理論集』において、ペシニスム、ニヒリスム、ディレクタントニスム、コスモポリチスムなどの「もろもろの概念」を使用し、前述した世代間の感性の遺伝という仮説、あるいは西洋文明が衰退期つまりデカダンスに入りつつあるという仮説などの「もろもろの大きな仮説」を軸にして論を展開する。またデモクラシーの確立、交通手段の発達、都市生活の変化など社会的事象にも多く言及し、一種の文明論を展開しつつも、文体論や、各作家の伝記的事実をもとに思想的背景を探るといったオーソドックスな文芸批評も行う。そして、このような「半ば社会的で半ば文学的な」アプローチによって彼が目標としたのは、文学テキスト自体の研究ではなく、もっぱらデカダンスの時代における「心理の研究」なのである<sup>4</sup>。

『現代心理論集』が書かれた 1880 年代前半は、小説ではエミール・ゾラを中心とした自然主義文学が全盛であって、ブルジェは、評論集の中でこの文学流派の起源や特質についてしばしば言及している<sup>5</sup>。前述したように、ペシニスムの起源を探ることがこの評論集のテーマであるから、自然主義文学についても、この観点から、デカダンスの一形態を表象する文学傾向として分析している。本論考では、今日からみても興味深い部分があるこの分析を概観し検討してみたい。

## 2. ブルジェの自然主義文学論

ブルジェは『現代心理論集』の中で、「自然主義」(naturalisme)という語は一度も使用していない。また、その形容詞形である *naturaliste* という語もごく控えめにしか使っていない<sup>6</sup>。その代わりに、フローベールやゴンクール

<sup>3</sup> *Ibid.*, p.202.

<sup>4</sup> ブルジェはテーヌの心理学に関心を寄せ、この評論集にもその影響は大きい。彼の「心理の研究」の主眼はテーヌ理論の適用にあるのではない。ブルジェの「心理の研究」を以下では括弧付きの「心理学」と表記する。

<sup>5</sup> フローベール論の第3章、テーヌ論の第3章、ルコント・ド・リール論の第1章、ゴンクール兄弟論の第2・3章、ツルゲーネフ論の第2・3章など。

<sup>6</sup> 例えば「自然主義と呼ばれる流派」(*l'école dite naturaliste*)と表現している。Bourget, *op. cit.*, p.332.

兄弟に影響を受けた現代の作家達の傾向、あるいは「観察の文学」<sup>7</sup>(*littérature d'observation*)というような言い回しがなされている。その理由は、1880 年前後に「自然主義」という旗印を掲げて、新しい文学理論を打ち建てようとしたのは事実上エミール・ゾラひとりであって、この名称を用いるとゾラの文学のイメージが強くなるからであろう。彼が論じる範囲はもっと広く、写実主義の延長であり、その特徴の一部を拡大させた形で継承した同時代の文学、今日の文学史では自然主義文学と便宜上呼ばれるような文学傾向一般である。ブルジェは、この自然主義文学が、どのようにして生まれ、どのような傾向を持つに至ったのかを、フローベール論、テヌ論あるいはゴンクール兄弟論の中で叙述している。それを以下で要約してみる。

ゾラとともに自然主義文学の祖といえるゴンクール兄弟は、歴史の記録的方法を小説に転用し、その作品において、多くの資料を駆使し、もっぱら風俗の描写にいそしんだ。そして彼の影響を受けた自然主義文学者達の美学は、

文学作品の価値は、有意義な記録つまりそのグループの指導者達のいうところの人間記録を、作品がどれだけ記述しているかによって測られる、というテヌの定言を適用することに他ならない。(中略)彼らにとって、書く才能とは、人間や社会に対する最大多数の正確な覚書を与えることに還元される<sup>8</sup>。

フローベールの写実主義と、彼の後継者たちの写実主義つまり自然主義文学との相違点は、フローベールが、具体的事物つまりは外的世界をイメージする想像力と、観念、感情、意志といった内的世界をイメージする想像力を持ち合わせており、その二つの想像力を作品に生かしたのに対して、後継者たちは、以上のような経緯で、もっぱら前者の想像力を重視したことにある。

このようにして、もっぱら環境の筆写に専念し、彼らは次第にその書物から意志の研究を消し去っていった。彼らは、周囲の事物に支配された、ほとんど個人的反発が出来ない人間を描くのである<sup>9</sup>。

このような傾向をブルジェは「意志の病氣」(*maladie de la volonté*)と呼び、それを、ゴンクール兄弟、アルフォンス・ドーデ、ゾラからジョリス・カルル・ユイスマンス、ポール・アレキシ、ギイ・ド・モーパッサンに至るまでの自然主義文学作品の習慣的なテーマだとしている。「意志の病氣」は、人

<sup>7</sup> 「観察の文学」という呼び方の重要性については後述する。

<sup>8</sup> Bourget, *op. cit.*, p.150.

<sup>9</sup> *Ibid.*, p.106.

間は環境に抵抗できないという、絶対的な決定論を生み出す。そして、自然主義作家は必然的に、人生の悲しさ、努力の虚しさを多く描き、その作品に意気阻喪させるメランコリーの印象を与えるのである<sup>10</sup>。

また『現代心理論集』の中で、自然主義文学の手法について、最もまとまって考察されているのはツルゲーネフ論の第2章においてである。以下でその要約をしてみたい。

写実主義は、心理的事象であれ物質的事象であれ、正確な観察を小説に導入する。そして作品から作者の姿を消し、主観的性格を排除して、いかなる結論も下さずに、対象を客観的に真実らしく表現することを目的とした。そのために写実主義は次の2つの手法を用いる。第1の手法は描写(description)を重視する、つまり登場人物が行動する環境を細かく正確に記述することである。人間は環境によって影響され、あるいは環境に影響を及ぼす。従って、描写の重視は、登場人物を明瞭に表現するためには有効な手段である。この手法には欠点がある。それは作家が、

より正確であろうとして、彼自身が細心の注意を払ってこの環境を見る。そして、彼が模写するものは、彼の芸術家としてのヴィジョンである<sup>11</sup>。

ことである。これは、神経質で鋭敏な感覚を持った作家についていえることだが、要するに、作家が、本来は排除すべきである自分の個人的、主観的性格を作品に導入してしまうのである。また、このような細かな描写によって、登場人物が、その作者同様に特異な感覚をもっていることが想定され、その登場人物から一般性が失われてしまう。自然主義の小説に、神経質で傷つきやすい人物が多く登場する理由の一つは、この論理の帰結である。第2の手法は、作品に、その社会階層の典型としての平均的人物を登場させることである。この手法は最大多数の普通人を描くために有効である。平均的人物は、英雄的人物のように環境に反抗する力を持たず、環境をより明瞭に反映、体现することができる。しかし、この手法の欠点は、登場人物から徐々に特殊性を取り除いていった結果、最後には、しばしば登場人物が人物としての性

<sup>10</sup> *Ibid.*, pp.330-333. ブールジェは、ゾラの『オ・ボヌール・デ・ダーム』(*Au Bonheur des dames*, 1883)に登場する健全な意志をもった女主人公ドゥニーズすら、その意志は「消極的成功」にすぎないとしている。同じ箇所では、「意志の病氣」は文学だけの傾向ではなく現代社会一般の傾向でもあることを強調している。つまり、雑多な思想の氾濫による自我のゆらぎ、哲学的宗教的確信の喪失による懐疑主義、科学の決定論、デモクラシー社会の全体行動の無力化、それらが現代人の個性や意志を弱体化していると考察する。

<sup>11</sup> *Ibid.*, p.359.

格が全くなかった、つまり普通人としての意味もなくなった抽象的な存在になってしまうことにある<sup>12</sup>。

このように、ブルジェが取り上げた自然主義文学の特徴は、端的にいえば、外的環境の描写を重視し、登場人物の個性や意志の力をないがしろにすることであって、この指摘自体は、ある意味で、ごく月並みな一般論かもしれない。しかし、彼の「心理学」的批評のオリジナリティは、その環境の描写の前提となる観察(observation)にペシミズムの源を見出すことにある。

### 3. 観察の文学とペシミズム

ブルジェによると、自然主義文学のように観察に基礎をおく文学は、ある国家の文学の末期に発達する。なぜなら、人間でいえば、若者が夢想や感情を自由に吐露するように、その国家の初期には、叙事詩や叙情詩が現れる。しかし、末期になると

厳密な分析への嗜好が発達し、写実主義的な緻密さが豊富な創意に取って代わり、芸術家は潤色された虚構よりも、意味のある醜さを好む<sup>13</sup>

からである。また、観察は以下のように必然的にペシミズムに導く。

観察することは、無意識的で豊かな生活から逸脱して、分析と省察と批評の中に入ることではないだろうか。これは本能的衝動が低下する確かな兆候である。そして我々の力の減退は、すべて憂いと結びつくものであるから、この兆候もメランコリーが生まれることの確かな保証となる<sup>14</sup>。

このように、人間の精神的なエネルギーを育てるのは、「本能的衝動」つまり「無意識」の働きであり、それを阻害し、人間をメランコリー、ペシミズムへと導くものは、観察とそれに伴う思考である。この観察とペシミズムの関係を理解するために、以下で『現代心理論集』全体の基調をなすブルジェの「心理学」的仮説を概観してみたい。

<sup>12</sup> Ibid., pp.357-360. もちろん、このような技法上の問題はすべての自然主義作家にあてはまることではない。ブルジェがゾラに宛てた 1877 年の手紙では、留保しながらも『居酒屋』を賞賛し、ゾラが意志(la Volonté)を信じていることを認めている。Voir L. Deffoux, *La publication de l'Assommoir*, Malfère, 1931, pp.111-112.

<sup>13</sup> Ibid., p.357.

<sup>14</sup> Ibid., p.365.

ブルジェのいう「無意識」(inconscient)とは、文脈から考える限り、かなり広い意味で使われており、意志や個性とも呼べる自然発生的な考え方や感じ方のことである<sup>15</sup>。『現代心理論集』において、「無意識」と対立するものとして提示されている概念が「思想」(pensée)である。この「思想」とは、人間が思考すること、あるいは思考によって生み出される観念、という意味で用いられている。ブルジェによると「思想」は観念である以上、外的世界と齟齬を起こし、人間を苦悩させる。そして「思想」の濫用は人間に生理的消耗と感情、意志の消耗をもたらす。また、雑多な「思想」の氾濫によって生じる、ものの見方の多様さや知識の豊富さ、と戯れること自体が、何かをなしとげようとする意志を弱体化させる<sup>16</sup>。さらに「思想」は、人間の「無意識」の働きを阻害し、感性を枯渇させてしまうような、絶え間ない自己分析の習慣に人間を導く。ブルジェはこれを「分析精神」(esprit d'analyse)と呼んでいる。「分析精神」は『現代心理論集』の重要なキーワードの一つである。この「分析精神」とは、自然発生的な自分の考え方や感じ方、つまり「無意識」を、自らが理性や「思想」でもって客観的に分析する精神である。「分析精神」が過剰になると、

考えることと考える自分を見つめること、感じることと感じる自分を見つめることが、同じことにはかならない<sup>17</sup>。

という状態に到達する。そして夢を抱く人間が、自分の思いどおりにならない現実のために苦しむのと同様に、人間が「分析精神」によって、自分の思いどおりにならない自らの感情や感覚を、観察し分析すること自体が苦悩となりうるのである。逆にいえば、「分析精神」の少ない人間は、自分の感じたことをいちいち立ち止まって吟味することがないので、様々な感情や感覚が次々に生じて、いわば熱烈な人生を生きることができる。

つまりは、分析精神と人生の間には、根本的な対立がある。なぜなら、いかなる人生も無意識という土台の上に成り立っており、まさに分析精神は、人間を支配するところの無意識を次第に破壊するものであるからだ<sup>18</sup>。

---

<sup>15</sup> 1880 年前後にショーペンハウアーとともにフランスで盛んに紹介されていたドイツの哲学者ハルトマンの概念「無意識」によって、この用語自体は、当時の文壇で流布していたと考えられる。

<sup>16</sup> 「思想」の弊害については、フローベール論の第 2 章などを参照。

<sup>17</sup> Bourget, *op. cit.*, p.398.

このようにブールジェの「心理学」的仮説をたどると、観察の文学である自然主義文学とペシミズムを、彼がどのように結び付けているのかがはっきりとする。作家が観察するということは、単に対象を眺めることではない。描写をするために、その対象を客観的に注意深く調べ、知識を得ることであり、それは「分析精神」に働きを促す。そして「分析精神」は、人間を支配し人生の土台となる「無意識」を破壊するのである。

#### 4.『現代心理論集』の視野

実際に、1880年代前半のゾラ、ユイスマンス、モーパッサンらの自然主義文学にはペシミスティックな作品が多く<sup>19</sup>、その原因は、ショーペンハウアーの厭世哲学の影響、普仏戦争の敗北とパリ・コミューンの惨劇のトラウマ、あるいは作家自身の神経症など、いくつか挙げることは可能であろう。しかしブールジェの独創的な点は、観察に基づく描写の重視という手法自体に注目し、そこに、ペシミズムが生まれる「心理学」的必然性を与えたことである。ところで、18世紀のラクロのような観念的な小説に代わって、19世紀において最も発達したのは、バルザックに始まる描写、それも主に環境の描写を取り入れた小説である。そして実証主義的風潮のなかで、その傾向がピークに達したのは1880年代の自然主義小説であった。『現代心理論集』において、取り上げた作家のほとんどが多かれ少なかれ末期ロマン主義の影響を受けているので、ブールジェはロマン主義に言及することが多い<sup>20</sup>。そして彼は、当然のことながら、19世紀文学をロマン主義から写実主義そして自然主義に至る一本の連続した線として捉えている。こうした視野を含めて考えると、ブールジェは、過度に文明化した西洋社会に進歩の行き詰まったアカダグスを見出したように、過度に描写を重視する自然主義小説に、19世紀小説の行き詰まった袋小路を見出しているように思われる。そして、今日からみると、その袋小路をラジカルなかたちで突破したのは、プルーストやシュレーリアリストなどさまざまな意味で「無意識」に関わる作家たちであった。

<sup>18</sup> *Ibid.*, p.404. 「分析精神」については、スタンダール論の第2章、アミエル論の第2章などを参照。また、ブールジェによると、古代人は「分析精神」をほとんど持っていなかったが、近代になるにつれキリスト教の懺悔の習慣によって発達してきた。それはやがて日記の習慣となり、自分の精神生活を観察するような現代人を生み出してきた、という。Voir *Ibid.*, p.399.

<sup>19</sup> 例えば、ゾラの『ごった煮』(*Pot-Bouille*, 1882)、ユイスマンスの『流れのままに』(*A Vau-l'eau*, 1882)、モーパッサンの『女の一生』(*Une Vie*, 1884) など。

<sup>20</sup> 1873年生まれのスーダンダールは例外だが、特にフローベールにおいてこの影響は重要視される。

ミシェル・マンシュイの評伝『ある現代人、ポール・ブルジェー 幼年期から『弟子』まで<sup>21</sup>』を読むと、この作家が、幼年時代からの幅広い読書や文学者達との交流によって身につけていた文学的哲学的教養の豊かさにまず驚かされる。『現代心理論集』に混沌とした形で詰め込まれたその豊富な知識は、ブルジェーの知的、精神的混乱を招き、1880年代の後半以降は、何らかの規範、指針を求めて手探りすることとなる。しかし、この評論集を書いた頃の彼は、後年のような伝統主義者でもなくカトリック擁護者でもなくブルジョワにおもねたモラリストでもなかった。当時の彼は、フランスに流布するあらゆる思想や哲学を何の偏見もなしに受け入れる中立的立場の批評家、ジャーナリストであって、それゆえ『現代心理論集』はこの時代の文学状況を反映した貴重で誠実な証言となりえたのである。そして、この評論集には自然主義文学に対する考察以外にも、象徴主義、神秘主義、ドイツ哲学の影響など、世紀末文学に対する興味深い議論がいくつも含まれている。ブルジェーの数多い「心理学」的小説は、20世紀小説に乗り越えられてほとんど忘れ去られた感があるが、この『現代心理論集』は、今日でも再読、吟味する価値を十分持った批評作品なのである。

---

<sup>21</sup> Michel Mansuy, *Un Moderne, Paul Bourget: de l'enfance au Disciple*, Les Belles Lettres, 1961.